

第30回

開成町福祉作文コンクール

入賞作文集



心れあいネットワーク



社会福祉
法人

開成町社会福祉協議会

小学生の部

優秀賞

◆開成町社会福祉協議会長賞◆

社会福祉体験について

開成南6年

伊東 心乃…1

◆共同募金会開成町支会長賞◆

知ること

開成5年

大野朱々風…1

◆開成町教育長賞◆

「バリアフリーって何だろう」

開成南6年

井上 温…2

優良賞

笑顔

開成6年

樋口ひまり…2

自分にできること

開成南4年

横山 花菜…3

佳作

Aくんのこと

開成6年

島田 蒼生…3

福祉の力

開成南5年

鈴木 開…4

ふれあい

開成4年

小沼 宥輝…4

私のおじいちゃん、おばあちゃん

開成南6年

近藤 杏音…5

幸せになるために

開成5年

深石 日葵…5

中学生の部

優秀賞

◆開成町社会福祉協議会長賞◆

様々な関わり方

文命3年

目黒なつき…6

◆共同募金会開成町支会長賞◆

人のために

文命3年

金森 胤海…7

◆開成町教育長賞◆

共生による理想の社会

文命3年

佐藤 健太…7

優良賞

ありがとう

文命3年

桐山 一颯…8

きみに伝えたいこと

文命3年

須賀田 翼…9

佳作

田舎の祖母が元気で暮らせるために

文命3年

坂本 亜美…10

祖母とともに

文命3年

遠藤 翔梧…11

一人暮らしから見えるもの

文命3年

木下 優花…12

私のひいおばあちゃん

文命3年

高橋あかり…13

誰もが一人の人間

文命3年

府川 凜…13

《資料》実施要項 審査員名簿

優秀賞

◆開成町社会福祉協議会長賞◆
社会福祉体験について

開成南小学校6年 伊東 心乃

私は、平成二十九年八月二日に、親子福祉一日教室に行きました。ふだん、福祉について学ぶ機会がなかったので、楽しみにしていました。

福祉体験では、二つの事を学びました。一つ目は、手話体験です。手話体験では、耳の不自由な人と会話をするために、いろいろな方法を教えてもらいました。その中でも、手や体を使って言葉を伝える手話という方法を体験しました。いちばん私の印象に残っている事は、乗り物を手の形や動きで表していることです。ふだん、「飛行機」と言葉で簡単に使っていますが、手話でも言葉と同じくらいの早さで伝わることにびっくりしました。私も、実際に教えてもらった手話を使って会話をしてみました。その時、私の伝えたいことが相手に伝わって、お互いに笑顔になれてうれしく思いました。

次に、聴導犬デモンストレーションという体験をしました。朝、目覚しが鳴ったときに起こしてあげたり、自転車のベルが鳴ったときに危ないことを伝えたりしていました。人間を同じように伝える事がすごいと思いました。私はふだん、犬をかわいいなとしか見ませんでした。今回実際に見て聴導犬はす

ごいなど改めて思いました。

今回、福祉の体験を通して、耳や目の不自由な人でも、私たちと同じ生活をしているので、会話などのコミュニケーションはとても大切なことだと感じました。また、聴導犬や手話などをとても大切だと必要していることが分かりました。

家に帰った後に、家族に体験のことを話したら、みんな知らないことが多く、教えてあげることができました。今回福祉体験はとても楽しくできたし、自分でも勉強になったことが多く思いました。これからも機会があったら参加して、いろいろな体験をしたいと思います。そして、困っている人がいたら手助けをしていきたいと思います。

◆共同募金会開成町支会長賞◆

知のり

開成小学校5年

大野 朱々風

「どうしようかな、座ろうかな。」

お兄ちゃんのひくトルコ行進曲に合わせてイスとリゲームをしていたときのことです。曲がとまったとき、まだイスは空いていました。今、座ればチャンピオンはわたしです。でも、こうきさんはまだ、楽しそうに行進中です。わたしは少し考えて、イスに座ることをやめようと思いました。少しして曲が止まったことに気付いたこうきさんは、あわててイスに座りました。チャンピオンはこうきさんです。こうきさんはとびっきりの笑顔で、うれしいときに出るキメ

ポーズもきまり、身体全体で喜びを表現してくれました。

ただ一つだけ、はつきりと言っておきたいことがあります。わたしはこうきさんに、「勝たせてあげた。」わけではありません。こうきさんに、「勝ってもらった。」のです。なぜなら、こうきさんの喜ぶ顔を、わたしが見たいと思っただけからです。こうきさんの笑顔は、そこにいるみんなも笑顔にしてくれるからです。

わたしは、土曜日や日曜日に高い者し設や福祉しし設に行き、ほう問えんそうのボランティア活動をしています。こうきさんの通うし設には、月に一回ある音楽クラブという時間に、ほう問していません。学校の友達のようにおしゃべりをするわけではないけれど、えんそうをしたり一緒にゲームをしたり体そうをしたり、「楽しい」ということが言葉以外で伝わってくるこの場所が、わたしは大好きです。言葉以外で伝えてくれるこうきさんたちを、わたしはとてもきれいな人だと思います。言葉はうそでも言えるけれど、こうきさんたちの伝え方にうそはないからです。

本当のことを言うと、初めてこうきさんの通うし設に訪問したとき、わたしは「こわい」と思いました。とつ然、大きな声を出したり、飛びはねたり、動き始めたり、今まで見たことのない人たちだったからです。でも何度もほう問して、「こわいと思うことが一つもなくなるととき、わたしは知らなかったただけなんだと気付きました。

こうきさんは、わたしの大切な友達です。こうきさんが笑えば、みんなが笑います。こうきさんから

始まる笑顔のバレードが、いつまでも続く日々を守る大人に、わたしはなりたいたいと思います。

◆開成町教育長賞◆

「バリアフリーって何だ？」



開成南小学校6年 井上 温

最近ニュースで「バリアフリー」という言葉をよく聞きます。僕は、道路のデコボコやお店の階段などで高齢者や身体の不自由な人、ベビーカーを押しているお母さん達が困っているのを見た事があります。「どうにかならないのかな？」と思った事があり、バリアフリーについて興味を持ち今回調べてみようと思いました。

その人達にとってバリア(障へき)をなくすことを「バリアフリー」といいます。車いすやベビーカーを使っている人がスロープやエレベーターを利用し、列の階へ行ける事はよく知られています。目の不自由な人が自力で外に出て目的地にたどり着くためには、点字ブロックや音声情報があり、耳の不自由な人には手話・文字や絵の情報があります。そして一番おどろいた事は、今までバリアとは階段や急な坂、せまい通路だけだと思ってきましたが、まわりの人達の無知によって、偏見にさらされ障害がある人たちへの心ない言葉、視線、無関心など、人々の意識の中にあるものもバリアだと知りました。障害がある人は何も出来ないという考え方もそのひとつです。このような考え方が、障害がある人達が力を発ぎで

きないことにつながっています。

「レン・ケラーは『見えない、聞こえない、話せない』という三つの障害がありながらも、『ぶつうの方々と同じように美しいもの、楽しい事にふれることはできる。暗闇とちんもくの中にも、無限の美しさを見いだすことができる』と自伝で語っています。

また、障害のある子をもつお母さんは、足に不自由があり、何度もあきらめずに自転車に挑戦する我が子の姿を見て「勇気のある子」と表現しました。障害のことよりも、めげずに頑張り続ける気持ちに、お母さんは人間として感動したそうです。『障害は、不自由であっても不幸ではない』この言葉がとても印象強く心に残っています。

バリアフリーではない事や場所が世の中にはまだまだたくさんあります。困っている人を見かけたら手伝えるような人になりたいです。もしそこまでできなくても「道路や点字ブロックの上に荷物を置かない」「店員や駅員に助けを求める」ことはできると思えます。障害がある人達と共に暮らしやすい社会になれるよう心がけていきたいです。

笑顔



優良賞



開成小学校6年 樋口 ひまり

私の祖母は、三年前に祖父が亡くなってから一人

で生活をしています。だんだんと一人ではできないことが多くなりました。休日は父や母が、買い物や部屋の掃除などを手伝っています。

祖母は私に会えることをとても楽しみにしているので、休みの日はなるべく会いに行き、話し相手をしていきます。話をする時は、わかりやすいように大きな声でゆっくりと話すようにしたり、買い物へ行く時は、段差がないか確認しながら一緒に歩きます。すると祖母は「ありがとう」と言って笑顔になります。この言葉を聞くと、私までもとても幸せな気持ちになります。人を思いやるということは、相手も自分も幸せにしてくれるのだと思いました。

また平日は、デイサービスを利用しています。デイサービスとは、日帰りで数時間の介護をしてもらえる施設です。食事や入浴、機能訓練などをし、自宅で自立した生活を送れるようにサポートしてくれます。

前に祖母と父と母と私は、施設を見学に行きました。色々なところに手すりがついていたり、床の段差がなかったり、お昼寝用のベッドがあったり、たくさん工夫がありました。そして、何より働いている方がみんな笑顔であたたかく迎えてくれたので、うれしい気持ちになったのを覚えています。

祖母は利用するようになってから、規則正しい生活が送れるようになって、笑顔が増えました。ご飯はおいしいし、みんなと体を動かしたり、ゲームをして、とても楽しいよ。」と語っています。友達もできて、祖母が明るくなったので、私はとてもうれいんです。

この先、高齢者が増えていきます。幸せな社会を

作るためには、まず笑顔でいることが、大切だと思います。笑顔でいると、周りの人も心おだやかにされるからです。そして大人も子供もみんな手を取り合い、助け合っていけたら幸せに暮らせると思います。

私は来年中生になります。中学生になったら、色々なボランティア活動に参加したいと思います。困っている人を見かけたら、進んで声をかけたり、手をさしのべていきたいです。その時は笑顔で…。

自由研究



開成南小学校 4年 横山 花菜

目がみえない人の世界は、まっくらなんだ。その合のじゅ業で、目かくしをしてゆうどうされるがわの体験をしたときにわたしが感じたことです。

世の中には、目の見えない人や耳が聞こえない人、体の不自由な人もいます。

わたしは、今まで自分が見えている人や景色、遊んだり勉強をしたりすることについて、考えたこともありませんでした。でも、じゅ業を通して、目の不自由な人や耳の聞こえない人が、ふだんどんな思いをして生活しているのかわかることができました。例えば、目の見えない人にぶつかってしまいかもしれない不安を感じていること。耳の聞こえない人は、周りで何の音がしているのかわからないから、すぐに行動できないこと。わたしが感じていない不安をかかえて生活しているんだと思いました。だから困って

いる時には何かをしてあげたいと思うようになりました。

そんなとき、わたしのおばあちゃんが足のつけ根をおつて、手じゅつをするケガをしてしまいました。入院中は、歩けなくなって物を取るのも、トイレに行くのも自分ではできなくなってしまいました。わたしはとても心配しました。今はつえをついて、ゆっくり歩けるようになったけれど、今までと同じように何でもできるわけではありません。おばあちゃんが動きやすいように、サツといすを引いたり、物を運んだり、言われなくても、自分で考えて動くようにしています。

いろいろな場所で、いろいろな人が生活しています。困っている人を見かけることもあるけれど声をかけるのは、とても勇気がいることです。そんなときこそ、自分に何ができるか考えられる人になりたいなと思います。やさしい人がたくさんふえたら、みんながくらしやすくて、あったかい町になると思います。



佳作

AVRIGU



開成小学校 6年 島田 蒼生

僕のクラスには、朝の会と給食と帰りの会のときに、かいせい学級のAくんがやってくる。詳しくは知らないけれど、何か事情があって、僕たちと同じ教室で勉強はしない。けれども、運動会や修学旅行のとき

には僕たちと同じように行動する。

Aくんとは、登校するときとときどきグラウンドで会って、一緒に校舎に入る。修学旅行のときは同じ班だったので、修学旅行に向けての話し合いや給食のときなど、ふれあう機会は多かった。修学旅行当日は行きの電車でまわりのみんなと一緒にトランプやウノをした。そのときに僕は思った。

僕たちと同じで何も変わらないのにな。僕はAくんのようにかいせい学級の子たちが僕たちと一緒に勉強をしない理由を家の人に聞いてみると、人によってそれぞれだけれど、何かの障がいがある、僕たちと一緒に勉強をすることが難しいのだということがわかった。

ふだんから僕たちと一緒に生活していないからかもしれないけれど、クラスのみんなとAくんの関わりはそれほど多いようには見えない。僕自身もそんなにたくさんは関わっていないけれど、クラス他のみんなよりは関わりが多いほうだと思っている。その僕が言うのだから本当だと思うのだけれど、Aくんはやっぱり僕たちと同じで変わらない。

確かに、たまに帰りの会のときに廊下で騒がしくしていたり、青いホースを口にくわえていたりすることがある。また、家の人が言うように、一緒に勉強ができない事情があるのかもしれない。それでも、同じ開成小学校6年生の子どもとして、お互いに関わりが少なすぎるような気がしている。

担任の杉山先生は、「Aくんと仲良くして、たくさん遊んでほしい」と言っていて、クラスのみんなも優しくしているし、修学旅行のときのように仲良くもしている。けれど、やはり、関わる機会がとても少

ないと思う。

Aくんに、そのことについて聞いてみることは難しいけれど、一緒に遊んでいるときにAくんが楽しそうな表情だったことを思い出すと、聞くまでもない気がする。

これから、運動会や連合体育大会、遠足などがあるけれど、できるだけたくさん関わって、同じ6年生として、よい思い出を残していけるようにしたい。

福祉の方

開成南小学校5年

鈴木 開すずき かい



ぼくの祖父は、今年の一月に、亡くなってしまいました。病気になるまでは、とても元気で毎日、仕事をしていました。病気になるまで、手術をしてから、だんだんと体が弱くなってしまいました。入院と退院を何回もくりかえしました。それでも、祖父は家で生活したいと希望しました。でも、家には、体の不自由な人が、生活できるような、準備がしてありません。そこで、病院の先生に相談して、町の人と会議してもらって、祖父が家でも、くらせるようにしてもらうことになりました。家の中では、ねていることが多くなったのでボタンを押せば動く、ベッドを借りました。体のおきをかせたり、起きあがりたりするのも、かんたんに自分でできるのです、世話をする人も助かりました。

足も弱って歩くこともできなくなってきたので、車

いすも借りました。体の調子が良い時は、車いすで散歩に行ったり、買い物に行ったりしました。車いすをおしてみると、バリアフリーの大切さがよく分かりました。

もし、ベッドや車いすが借りられなかったら、祖父はずっと病院で生活をしていなくてはいけなかったのかも知れません。大好きな家に帰ってこれなかったのかも知れません。だけど、ベッドや車いすを借りられたことで、祖父の生活は変わりました。

体の不自由な人、病気を持っている人達が大好きな自分の家で、生活できるように、社会の力、福祉の力をかりなくては、生活していけないと思ってきました。こうして、体の不自由な人は生きている。世の中には、バカにしたりする人もいるかもしれない。でも、祖父のように体の不自由な人は、その人なりに一生けん命に生活している。祖父は、福祉とたくさんの方の力を借りて、自分の大好きな家と大切な家族といっしょにすごせました。

祖父を見ていて、できるだけ元気な時と同じように動いたり、出かけたり、散歩したりできるように力を借してくれるのが、福祉なのだと思います。福祉があったから、祖父は最後まで自分らしく生きれたのだと思います。

ふねあい



開成小学校4年

小沼 宥輝こぬま ゆうき

わたしは、小さい時からあわおどりをやっています。

す。わたしの入っているれんでは、毎年いろいろなう人ホームをい問しています。い問では、ホームにいるお年よりの前であわおどりをおどったり「すきになった人」という歌にあわせてふれあいながら一しよにおどったりしています。

い問の時、わたし達がおどっているのを見てくれるお年よりは、やさしい顔でわらってくれます。中には、泣きながらよるこんでくれる人もいます。手をつないだり、手をたいたり、車イスをおしながら一しよにおどる時は、うれしそうにわらってくれます。わたしは、そんなお年よりを見て、「うれしいな。幸せだな。」と思いました。

そこでわたしは、お年よりにできる事を考えました。それは、ふだんのお世話を手伝う事はできないけど、おどりを見てもらってよるこんでもらう事、手をやさしくにぎってあげる事です。そうすれば、お年よりが笑顔になってくれると思うので、ふれあう時には、その笑顔のおかげで、自分が幸せだという気持ちになっている事を伝えたいです。

でも、い問の時だけふれあうのではなく、他の時、体の不自由な人にもできる事があると思います。わたし達は歩く事ができるので、車イスの人がいたらおしてあげる事ができます。目の不自由な人や歩く事がふ自由な人と一しよに横たん歩道をわたる事もできます。重い荷物を持っているお年よりを手伝う事もできます。まだまだたくさんできる事はあると思うけど、こまっっている人やお年より、体の不自由な人を元気なわたし達が助けたり、ふれあう事が大切だと思います。

手伝う事、手をつなぐ事、え顔をみせてあげる事、

わたし達ができる事できょうかしていけば体のふ自由な人もお年よりもわたし達もみんながうれしい気持ちになれると思います。

ふれあいで、みんなが明るく幸せな社会を作っていききたいです。

私のおじいちゃん おばあちゃん



開成南小学校6年 近藤 杏音

私のおじいちゃんは、脳こうそくになつてしまいました。病気になる前は、畑仕事をすることが好きでした。自転車に乗ってお散歩をしたり、新聞や本を読んだり、私とキャッチボールをしていました。でも病気になる、出来なくなりました。目が見えづらくなつて、バランスがうまくとれません。手や足も思うように動かず、おこりっぽくなつてしまいました。おばあちゃんと毎日のようにケンカするようになっていました。病気と分かつてもイライラすると言っていました。しかし、おばあちゃんは家事をしながら、おじいちゃんを支えています。

おじいちゃんは、かい護しせつに週二回通うことにしました。私は、かい護しせつで、一日中どんなことをしているのか聞いてみました。かい護しせつでは、同じ病気を持つている人と話したり、カラオケやクッキングやミニ運動会などのイベントがあったり、たんじょう日にはプレゼントをもらったり、楽しそうですね。そのおかげで少しずつおじいちゃんは、元気になるしました。畑仕事もやるようになって、畑で育て

た野菜を私に分けてくれます。ダジャレを言ったりして、前よりも明るくなりました。

ある日おばあちゃんは、階段から足をすべらせて、手と足をケガしてしまいました。階段を登り下りするのが大変なので、手すりをつけました。ベッドも二階から一階にしました。前からひざま悪かったので、家事をするのにつらい日があるそうです。

私が小さいころは、よくとまりに行ったり、いっしょに遊んだりしてもらいました。でも今は、学校や習い事があつて、なかなかおじいちゃんの家遊びに行けません。しかし、休みの日におじいちゃんの家に行つて話しをしたり畑仕事の手伝いをしたり、いっしょに遊びに行つたりすると、とてもうれしそうです。だからなるべく、おじいちゃんおばあちゃんに会いに行きたいです。

家族のみんなが元気なことでも、とても楽しいし、それが大切なこととおじいちゃんの病気で分かりました。おじいちゃんとおばあちゃんには、これからもずっと元気で長いきしてほしいです。

幸せな日々



開成小学校5年 深石 日葵

大雨の中、おばあちゃん達と買い物に行った日のことです。雨やどりをしようとして屋根のあるところまで急いで行きました。ほつとしてうしろをふり返つたら、まだ遠くにおばあちゃんがゆっくり歩いている姿が見えたことに「は」としました。

私は、前に見えにくくなるめがねをかけて手ぶくろをしたまま洋服のぬぎ着をしたり、足に重りを付けて歩いたりなど、お年よりが感じる不自由さを体験したことがあつたことを思い出しました。

その時は自分のことだけしか考えず、人のことまで考えてあげられませんでした。小さい時は手をつないでもらい自分が歩くペースを同じにしてもらっていたのに、私は、ペースをあわせてあげられませんでした。この時から自分だけではなく、相手のことを思いやり考えられるようになりたいと思ひました。町の中でもお年よりや体の不自由な人には席をゆずつたり、スロープや点字ブロックなどは物を置いてしまつと道をふさいで通れなくなつてしまつので、みんなが思いやりをもって生活していけるといいと思います。

「福祉」という言葉を辞書で調べてみたら「幸福」とありました。どうすればみんなが仲良く楽しくくらすのかと考えました。こまつている人がいたら手伝つてあげたり、あいさつをしてコミュニケーションをとることも大事だと思ひます。ただ、助けてあげることだけではなく、その人の生活の中で何が必要なのか、相手の気持ちを感じたり話を聞いていっしょに考えていくことも幸せにつながるこつだと思ひました。

大人も子どもも地いきの人みんながその人らしく生き生きと毎日が「幸せ」と感じられるそんな社会になつたらいいです。最初は小さな輪でもきつと大きな幸せの輪になつていくのが楽しみです。私もたくさんの人達に支えてもらつているということをおすれずにすごしていきたいです。

中学生の部

優秀賞

◆開成町社会福祉協議会長賞◆

様々な関わり方

文命中学校3年 目黒 なつき めぐろ

私はほぼ毎日電車に乗っているのですが、過去に、電車から降りた時に、白杖を利用している方に声をかけている人を見かけたことがあります。以前は「福祉」という言葉から連想していたのは「お年寄り」や「障がいのある人」等だった私ですが、この時から考え方が少し変わりました。

私は、その姿を見た時、とても心が温かくなりました。「たすけあい」というものは、助けた人と助けられた人だけのものではなく、周囲の人の心を動かす力があることにその時気付きました。「福祉」というのは、不自由なく暮らしている人にも良い影響を与えるんだと考えました。

他にも、電車を利用しているといういろいろな出来事に出会います。私が帰る時に利用する電車は、どちらかというかと混んでいるという時もあります。私は何人かの友達と一緒にいるので、座らずに立っていることがほとんどです。そのような状態で、お年寄りや、荷物が多くて大変そうな人に席を譲る人の姿を何度か目にしたことがあります。そんな中、私はあることに気付きました。それは、席を譲る時に、「ごうざ。」

と声をかける人もいれば、何も言わずにすっとどこかへ行ってしまいう人もいるということです。また、私が見ている中では、後者の方が多いような気がします。

先程私は何人かの友達と一緒にいると述べましたが、そんな私達を見て、席を詰めて並んで座れるようにしてくれた人は今までに何人もいます。その時も、声をかけてくれる人もいれば、ちらっとこちらを見たと思ったら席を詰め、その後はずっと携帯電話を見ている人もいます。そして私達がお礼を言った時も、私達を見て笑顔で会釈してくれる人もいれば、携帯電話を見たまま軽く頭を下げる人、ほとんど反応してくれない人もいます。私達は、声をかけてくれたり、お礼を言った時に反応してくれると感謝の気持ちでいっぱいになります。しかし、何も言わずに席を詰めたり、お礼を言ってもあまり反応してくれなかったりすると、ありがたいというよりは申し訳ない気持ちになってしまいます。

これは、私達だけでなく、席を譲ってもらってお年寄りや、妊婦さん等も同じ気持ちなのではないでしょうか。私も席を譲ったことがあります。確かに声をかけるのは少し勇気がいりましたが、確かに声かけをせずに無言で席を譲る方がやりやすいのかもしれない。しかし、せっかく席を譲る気持ちがあるのなら、お互い、そして周囲の人の気持ちがいり温かくなる「声かけ」をするべきだと思います。それに、目を見てお礼を言われることは誰だつてうれしいと思いません。

では、どうしたら「声かけ」をしやすくなるのでしょうか。私は、譲ってもらった人の「お礼」が一番の

力になると考えます。お礼を言われた人は「これからも行っていい」と思えるし、それを見た周囲の人は「よし、自分も」と勇気を与えられると思うからです。それが広がっていけば、自然と「声かけをしやすい環境」になると考えます。これは、電車の中に限ったことではありません。駅のホームにいる時、道を歩いている時、いつでも「困っている人を見かけたら声かけをする」という意識を持ち、皆で「声かけをしやすい環境」をつくり上げていくべきだと思います。

優先席を用意する。段差をなくす。スロープを利用できるようにする。音声ガイドを使えるようにする。エレベーターのボタンを低い所にも取り付ける。そのようなことは福祉社会の実現にとっても効果的だと思えます。しかし、「設備」だけではどうにもならないこともあると思います。福祉社会の実現にあたって必要なのは皆の温かい心だと思えます。助ける人、助けられる人。声をかける人、お礼を言う人。たくさんの方が、様々な形で「福祉」に関わっています。ちょっとした心掛けやコミュニケーションの積み重ねが福祉社会の実現につながります。福祉社会は誰かのものではなく皆のものです。「自分にできること」は人によって違いますが、必ず何かあるはず。身近なこと、できることから始めて、「温かい心」を広げ、福祉社会の実現に貢献していきたいです。

◆共同募金会開成町支会長賞◆

人のために



文命中学校3年 金森 胤海

かなもり かずま

中学生になり、塾や部活で電車を利用することが多くなりました。いつも目につくのは優先席です。そこに座っている人は、ほとんどいません。空いているし、周囲に優先されるべき人が見当たらないのに、何故座らないのだろうと思って、自分はいつも平気で利用していました。座る人がいないなら、座るべきだと思っていたのです。しかし、最近になって身近で起きた出来事で、自分の考え方が変わりました。

先日、部活の大会で電車を利用しました。都会というところもあり、人が多くて空席は少なかったのですが、やはり優先席だけは空いていました。いつもなら座るところですが、他の乗客が座っていないから、座る気分にはなりません。駅に着くと、乗客の多くが降りていき、乗ってくる人も大勢いました。杖を持ったおじいさんが乗ってきました。普通席に空席はなく、空いているのは優先席だけだったので、おじいさんは優先席の方に向かいました。しかし、スマホを片手にした青年が、割り込むように座りました。優先席付近では、携帯もマナーモードにしないでほしいし、目の前には杖を持ったおじいさんがいるのですから、その青年は座るべきではない誰でも分かると思います。おじいさんは声をかけていました。青年はイヤホンをして耳を貸してくれないので困っていました。その時、普通席に座っていた人が立ち上がり、おじいさんに席を譲ったのです。

その人は、とても重そうな荷物を持っているのに席を譲り、おじいさんと笑顔で会話していました。優先席の青年は、「あの人もあんな風に親切になれたらいいのに」、「マナーが悪い」と周囲の人達から言われていました。自分も周囲の人と同じように、怒りを感じたり呆れたりしていましたが、考えてみると、あれがいつもの自分なのです。お年寄りの前に割り込んだり、その時は座っていませんでしたが、いつものように座っていたら、馬鹿にされていたのはその青年ではなく自分だったのかも知れません。そう考えると、いつもの自分が、いかに愚かだったのか気付かされました。そして、他の場面においての自分はどうなのかも気になりました。思い返してみると自転車で道を走る時に右側通行したり、駅の階段の表示を無視したり、信号を待っている時に点字ブロックの上に立っていたり、日常の行動の中にも、愚かな行動が多く思いつきました。今は思いつかないだけで他にもあるかもしれません。一昔前は駅にエレベーターなどなく、車イスの人を駅員や乗客の男性が4人がかりで階段を登って運んでいたと聞いたことがありますが。そう考えると、自分たちのような健康な若者が駅のエレベーターを使う事も、マナー違反なのかもしれません。自分は今まで、席を譲ったり、重い荷物を持っている人を助けたりしたことありません。優先席に座った青年は快適だったのでしょうか、杖をついた老人の立っている時の辛そうな表情や、席を譲ってもらった時の安心した表情を思い出すと、自分の無神経さに腹が立ちました。

優先席や点字ブロック、スロープなどはそれを必要としている人のためにあります。点字ブロックは、目の不自由な人のために設置されています。私は目が見えるので、視覚障害者の気持ちに分かりませんが、考えたこともありませんでした。そこで、目を閉じて歩いてみると、部屋の中にも何かにぶつかりました。手を宙を泳ぎ、歩いたたびに何かにぶつかりました。外を歩くことなど、恐ろしくてできそうにありません。神経は指先や耳に集中し、足の感覚は知らないうちに敏感になっていました。点字ブロックの大切さが、身をもつて分かったような気がします。

点字ブロックを頼りに歩いている時に、点字ブロックの上に自転車が当たると想像すると恐ろしくなります。不安なく暮らしている自分達が、障害を持ったり人たちに少しでも手を差し伸べる、それが自分達にできる最大の福祉です。老人に席を譲ることや、目の不自由な人の手を引いたりするなど直接の行動や働きがけでなくても、点字ブロックを避けて歩くことや、スロープやエレベーターを使わないなども立派な福祉なのです。自然を周りに気を配ることのできる人間になりたいと思います。

◆開成町教育長賞◆

共生による理想の社会



文命中学校3年 佐藤 健太

さとう けんた

二年生だった時の学年集会で、学年主任の先生が私達の同級生が人助けをしたという話を紹介して下さいました。彼は、自転車を駐輪場から出せずに困っている高齢女性を助け、自転車を出してあげた

そうです。この頃の新しい駐輪場は、ロックを解除する際にも電子機器を使用することが多く、その女性には電子機器の使い方が分からなかったのです。後日、わざわざ学校によってまでお礼を言いに来たということは、本当に困っていた所を助けられたのでしょう。困っている他人に手を差し出してあげることには素晴らしいのですが、自分がその状況に遭遇したなら、同じように助けてあげられたでしょうか。私達が三年生に進級した際に行われた全校集会では、新入生が受けた表彰の話がありました。彼女はまた小学生だった時、倒れていた高齢女性に気づき、連絡して救急車を呼んで助けたのだそうです。その適切な行動から、地域の警察から表彰されたのです。指示を仰いだり、誰かに相談するのではなく、自分で連絡をする行動力や判断力に感心しました。

少子高齢化の影響で、これからますます高齢者が関わる事故やトラブルの増加が心配されます。それは、私達が助けるべき機会の増加を意味しています。自分がその状況に遭遇した時、果たして適切に行動ができるのか、正直不安になります。消防に連絡した経験もなく、体調が急変した人を直接見たことはありません。いつか遭遇するかもしれない急を要する事態に対応できるようにするためには、私達若者が現状を理解し、対処法について学ぶことが必要です。高齢化はますます進むと考えられることから、私達の意識を変え、行動することに備えておくことが、高齢者を含めた人助けにつながると思っています。日常生活の福祉には、若者の意識改革が必要なのです。優先席や道の譲り合いは、意識とい

うより気配りだと思っからです。私の祖母は、外出する際に車椅子を使用します。車椅子や杖を必要とする高齢者にとって、揺れる車内で長時間立つということは、大変な苦痛であると思います。人命救助ほどの事態でなくても、小さな福祉は増えてくるはずで、日常生活の中で、常に周囲に注意を払うことの大切さを改めて認識しました。

私の母は介護福祉士として働いており、仕事として高齢者と関わっています。介護の知識はもちろん、命に関わる医療の知識も必要だそうです。母が言うには

「人生の先輩だから、感謝の気持ちを持って。」

お年寄りに接しているそうです。優しいお年寄りもいれば、気難しいお年寄りもいるそうですが、まずは丁寧に接して行動するようにしているのだと思います。

学校の紹介された同級生や新入生の行動や母の話聞くまで、私は福祉について無関心で他人事のように考えていましたが、今までの自分の認識では福祉に貢献することはもちろん、社会と「共生」することはできないと思っていました。更に進んでいく高齢化社会に対応するためには、福祉をもっと充実させていく必要がありますが、私達ができることは、日常的な意識を高めて現在目標としている福祉を当然のこととすることが必要です。若者と高齢者の交流が手薄になっていますが、私達にとって高齢者の方々は助ける存在というだけでなく、伝統的なことや大切なことを伝えてくれる存在でもあるのです。福祉が一方的なものではなく、お互いのためのものになってこそ理想的な社会であると思います。

今年の夏休みに私は地元のゲートボールの練習に参加し、何人かの高齢者の方と知り合いました。それまで見たことはあっても、話したことがなかった人もいましたし、初めて会った人もいました。練習で知り合った人々とは、町ですれ違う時に自分から挨拶するようにしています。私が気付かずにいると、相手から声を掛けてきてくれます。何気ない会話の中から教えられることもあり、親族の大人や同級生との会話とは違った、新鮮な発見があります。高齢者の方々と交流する機会は、私をも成長させてくれました。理想的な社会を実現するためにも、まずは地域に貢献したいと思っています。



あしがら

文命中学校3年 桐山 一颯

さりやま いっさ



「全ての人が幸福で安心した生活を送る」これが、私の考える理想の福祉です。しかし、それを実現することはとても難しいことだと思います。多くの人々が具体的にどのような行動をするべきなのかかわからないのではないのでしょうか。最近まで私もそうでした。夏休みのある日、私は友人四人と映画館に行きました。映画館まではバスを利用するのですが、その時はお昼ごろだったため、いつもより混雑していました。私たちは早くバス停に到着していたので一番

後に五人並んで座ることができました。その後も、バスが停留所に停まるたびに乗客は増えていき、空席は次々に埋まっていきました。その後とある停留所から、一人の高齢者が乗ってきました。とても腰が悪そうに見える人だったので、座席に座っていきませんでした。私が内心どうするべきなのかと迷っているとき、私の隣に座っていた友人が立ち上がり、席を譲ったのです。すると、そのお年寄りは笑顔で礼を言い、席に座りました。私を含め、その場において席を譲ることを迷っている人は他にもいたのかも知れませんが、最初に行動することができたのは、彼だけでした。自然に行動し、気持ちよく席を譲っている友人を見て、果たして自分に同じことができるのだろうか、難しさを痛感すると同時に、尊敬の念を抱きました。私は、彼の勇氣ある行動を目の当りにして、行動するという勇氣を与えられました。お年寄りの安心した笑顔を、誰でも作り出してあげられるのだと実感したからです。次こそは自分がやると、強く思っていました。その時はすぐに訪れました。あるファーストフード店でのことです。お年寄りの夫婦が困っているのを見かけたのです。私は以前の友人を思い出しつつ、思い切って声をかけてみると、どうやら注文の仕方が分からなくて途方に暮れていたそうです。話をしながら注文の仕方を教えてあげると、まるでバスで席を譲られたお年寄りのように、嬉しそうな笑顔で「ありがとう」とお礼を言うてくれました。もし、その老夫婦を見て見ぬふりをしてしまっていたら、後になっても心のどつかに引っかかってしまっていたと思います。そして行

動するという一歩をふみ出してからは、心を楽にして困っている人に声をかけられるようになりました。私のやってきた事や出来る事は、小さなことばかりです。しかし、困っている人はお年寄りばかりではありません。何らかの障害を持つ人や、生まれながら不自由な人も多くいるのです。自分のために行動するのではなく、他人のために少しの行動を起せるということが社会全体に広がり、福祉が向上していくと思っています。しかし、優しさや親切の押し売りはいけません。以前、電車で高齢者に席をゆずろうとした人が、断られている姿を見たことがありません。私も小学校の時、自転車で踏み切りに閉じられてしまったおじいさんを友人と助けたことがあります。その時、おじいさんはお礼も笑顔も見せずに立ち去ってしまいました。当時の私は「助けてあげたのに」と思っていました。今考えると、お年寄りあつかいされたかと思っていたのかもしれませんが。相手のことを考える、これはとても難しいことです。しかし、私たちは感謝されるためにやるのではなく、本当に困っている人を助けたいからやる。これが「福祉」だと思っています。たとえ、喜ばれなくても良い行動をしたと自信をもって行なえるようになりたいと思います。

私はこの夏休みという短い期間の経験から様々なことを学び考えさせられました。福祉というと初めはとても難しいことのように感じますが、日常生活の中でも私たちにできることは沢山あります。困っている人を助けることは勇氣のいる難しいことですが、身近なことから少しずつ行動していきたいと思えます。そして最近では、バリアフリーと呼ばれる障害者などをサポートする施設も普及してきました。その手がとどかないところもたくさんあります。そんな時に若い世代の私たちが協力し、助けあうことができる。これが本当の福祉だと思います。

きみに伝えたいこと

文命中学校3年 須賀田 翼

すがた つばき



とか

「なんだよ。あいつ。どうした？」

といった冷たい言葉が陰でゴソゴソ言われたりしてしまいました。私はそういった人たちを見て心が悲しくなりました。そして傷つきました。学校だけじゃない。どこか買物に出掛けた時には、姉のことをジロジロ見られたり、指をさされたりしている。姉は何も悪くないのに……。私は悔しい気持ちで胸がいっぱいになりました。母が小さい頃私に言っていた「これから大変になると思うけど、がんばってよ」の意味が少し分かったような気がしました。

しかし、私は姉の良いところがたくさんあるのは知っています。私は野球部に所属していて、一日練習の時にはお弁当を母が作ってくれます。そしてそのお弁当を私が食べた後に、そのお弁当箱を机の上においておくと、姉が勝手にお弁当箱を洗ってくれます。また、自分から進んで洗濯物をたたんでくれます。これだけじゃない。姉は困っている人を見ると姉のほうから話かけたりして、元気づけてくれます。そして人の悪口も言わない。こんなにも姉は人に対して優しくしてくれているのに、なぜ姉は人に冷たくされてしまうのがとても悔しく感じました。

私たちの家族は姉が悪いことをすれば、すぐ怒るし、何かに挑戦し良いことをすればすぐほめる。というふうには私たち家族は姉を障害児として特別扱いはしないようにしています。

母は姉を産んで姉の障害を知ったときは、とてもつらかったと言っていました。しかし、それでも私の母は、そんなことを言われても障害のない人と同じ

ように過ごさせたりしていて、私はすごいと思っています。

最近では、たくさん人の福祉サービスがあります。そういったものが増えていくことは本当にすばらしいことだと私は思いました。そして、ありがたいなと思いました。なんだかおかげさかもしれませんが、日本全体が一体化しているような感じがしました。でも、一部では違います。だからその一部をなくすためには、どうすればいいかを考えてみました。私は日本に生きる一人ひとりが障害を理解して、その人を知ることが大切だと思います。この世の中には本当にたくさんの人々があります。みんながみんな平等で幸せな人生を送るためには、やっぱりそれが大切で、それができればだれも傷つくことはなく良い人生が送れると私は思います。

私はこれからたくさん姉と家族で楽しく過ごしていきたいと思います。そして自分が強い心を持ち、自分が姉をこれから支えられるようになりたいです。そして最後に言いたいことがあります。障害のある人ない人に分けないでほしいです。だって、私たちはみんな命の重さは変わらないのだから。



佳作



母の祖母が元気で暮らせたこと

文命中学校3年 坂本 亜美

今年の夏休みに、おばあちゃんの家に遊びに行き

ました。おばあちゃんの家は岩手県の八幡平市にあります。おばあちゃんの家には山や畑があり、緑がきれいな自然豊かなところにあります。おばあちゃんとは、四年ぶりに会いました。六十七歳になるおばあちゃんは、四年前に比べると、少しやせたように見えたのですが、毎日やっている畑仕事で日焼けした肌を見ると、とても元気そうに見えました。

おばあちゃんは、私に「大きくなったね、何歳になったの。」と何度も聞いてきました。私は「十四歳になったよ。」と答えても、少し時間が過ぎると、同じ質問を何度も繰り返してきました。私は、不思議に思いながらも、おばあちゃんは歳をとって物忘れが多くなったなど思っていました。夜になると、いつもはたくさんさんの郷土料理を作り、私たちをもてなしてくれていたおばあちゃんでしたが、今年には台所に立つことも少なく、出された料理は、いりとりもなく、品数も少なく感じました。いつもなら、みんなでテーブルを囲み、楽しく夕食を食べていましたが、おばあちゃんは夕食を食へようとはせず、家の中をウロウロと歩いていました。どうしたんだろうと思いい、おばあちゃんを見ていると、「おばあちゃんほげちゃったんだよ」と母さんがいました。「料理をすることとか、食へることとか忘れちゃったんだって。」と話し、少し悲しそうな顔をしていました。「おばあちゃんの作ったひつまみも、もうたべれないね、みんなで味を忘れないようにしましょうね。」という母に、何て答えたらいのかわからなくなりました。おばあちゃんは一年くらい前から認知症の症状が出はじめたそうです。はじめは、ちょっとした物忘れでしたが、今では、料理をすることや食へるこ

とをしなくなり、昔の話は思い出すけど、最近のことは思い出せなくなっているそうです。少しやせたようにみえたのは、食事をとらなくなってしまうたからだと理解ができました。母は、「これから、認知症が進むと、少しずつできなくなることが増えていくんだよ。」と教えてくれました。もしかしたら、おばあちゃんはいつか、私のことも忘れてしまうのかと心配になりました。それから、おばあちゃんはこの先どうしたら安全に過ごしていけるのか心配になりました。

おばあちゃんの家はとても田舎です。近所にはスーパーがなく、買い物には車を使わなければなりません。道路も舗装されていないので、とても歩きにくいです。高齢のおじいちゃんとおばあちゃんがくらししていくには、とても大変だと思いました。母は、介護サービスを受けられるにはどのようにしたらいいのか、考えていました。一緒に住んでいるのなら簡単な手続きでも、離れているから簡単にはいかないと話していました。最近では、高齢者だけで暮らしている人も多くなっています。私たちの住んでいる開成町でも、高齢者の世帯数の割合が十一パーセントを超えたといふインターネットで調べました。八幡平市は二十九パーセントと倍以上です。しかし、開成町に比べると、八幡平市のほうが道路が整備されていなくなったりと、くらしにくいことが大変なように感じました。田舎だからしょうがないではなく、全国の高齢者のみんなが安全に過ごしていけるようにしてほしいと思います。これから、私もおばあちゃんが安心して過ごしていけるように、考えていきたいです。

おばあちゃんの家から帰ってくる時、おばあちゃん少しさみしそうでした。「またね。」と手を振りながら、私のことを忘れないでねと心の中で思いました。家に帰ってからは、毎日のように電話をするようにしています。夜と昼を取り違えないように、同じ時間に電話をして、話し相手になろうと考えています。そうすることで、物忘れが少なくなり、いろんなことを思い出してくれるのではないかと思います。おばあちゃんが忘れてしまった郷土料理は、母と一都に作り続けて、いつかおばあちゃんに食べさせてあげたいと考えています。

祖母とユウキ

文命中学校3年

遠藤 翔梧 えんどう しょうご

「変な事、何回も話したら言って」「わかったよ。」「煮物の味、どう？、おかしくない？」「おいしいよ、大丈夫、まだボケてないよ。」「お盆で久々に祖母の家を訪ねた時の祖母と母の会話だった。

祖母は、九月で七十九歳になる。二十年前に祖父が亡くなり、小田原でずっと一人暮らしをしている。僕の両親は共働きの為、僕が高学年の時、夏休みなど祖母が僕の家に毎日通って来てくれて面倒をみてくれていた。中学生になって部活も忙しくなり、ここ数年は祖母に会う機会が少なくなりました。久々に会った時、祖母は元気そうだったが、僕の身長が伸びたせいか祖母が少し小さくなってしまったように思えた。それ以外は、以前と変わらぬ元気な

祖母のように思えた。祖母の家の冷蔵庫に、以前にはなかったカレンダーがつるしてあった。僕が見ていると「それいいでしょ。色々書いて」と祖母が話かけてきた。よく見ると、予定はもろろんの事、その日にあった事した事が色々書いてあった。「日記まではいいけど、ボケないように書いてるのよ。」「祖母はそんな事を言っていた。そして右端に何や四けたの数字が書いてあった。「これは？」と祖母に聞くと「万歩計だよ。歩かないと足腰も弱くなっちゃうからね。」「以前と違い、自分の事を気をつけているからその為に、自分でも色々気を付けて生活しているんだよ。」と言っていた。ピンピンコロリの意味が分からず、母に聞くと、認知症とか病気になる元気に長生きして、コロッと亡くなるという事だった。だから祖母はボケないように、一行日記を書いたり歩いたりしていたのかと思った。祖母はそれ以外にも、毎朝ラジオ体操をしたり、バランスのよい食事を心がけたり、体操教室に参加したお友達と一緒に能トレをしたりしているらしい。

僕はお年寄りの一人暮らしの生活について調べてみようと思った。まず平均寿命は男性が八十・九歳、女性が八七・七歳で高齢だ。また六十五歳以上の方の一人暮らしの割合は、男性が十一%、女性が二十%だ。子供と同居する割合が減ってきており、今後ますます一人暮らしのお年寄りの数が増えて行く事が予想されるといふ。そういう実態もあるからか、よくテレビでも認知症の事や健康の事についての番組がよくやっており、祖母も参考になっている

一人暮らしが見えぬもの



文命中学校3年 木下 優花 きのした ゆうか

「こんにちは。」

と言っていた。そういう番組を母も良く観ている。僕は母が今からボケないように見ているのかなと思っ
ていたが、今回、認知症について調べていた時、母は
祖母のサポートする立場で観ていたことがわかった。
認知症は色々な症状が出る。忘れっぽくなったり、
同じ事を話してみたり、味覚も変わってしまうとい
う。お盆に祖母の家に行った時の祖母と母の会話は、
チエツクの為の会話だった。母は、週末には祖母の家に
行き、散歩をしたり、一緒に料理をしたりして祖
母に変わりがなにか気にしている。又、平日は仕事
がある為、会いには行けないが、母の携帯に祖母の方
歩計のデータが送られるようにして、元気にしてい
るかわかるようにしている。方歩計のデータの事は、
始めは、監視されているみたいで嫌だと言っていたが、
今では、「自分が倒れたりした時に誰にも気づかれ
ないのが不安だ。」と言っていた事もあり、安心に変
わったようだ。お年寄りが安心して一人暮らしを
するには周りのサポートも大事なのだと思った。

最近、テレビや社会の授業でもよく聞くことであ
るが、一人暮らしをする老人が増えているそうだ。
私のおばあちゃんもその一人だ。私が小学校5年生
のときの5月、おじいちゃんは「がん」で亡くなった。そ
れまでは、二人で暮らしていたが、おじいちゃんがい
なくなってしまうてからは少しさびしそうで、生活
もしづらそうに感じる。

僕は小さい頃から祖母には世話になってきた。暑
い日も、寒い日も、雨の日も嫌な顔せず、むしろ僕
の顔を見にくるのが楽し目というように僕の家に来
てくれていた。そんな祖母は、今、家族に迷惑をか
けたくないと「ピンピンコロリ」を目標にがんばって生
活している。祖母がいつまでも元気で長生きできる
よう、僕もサポートしてあげたいと思った。今、僕が
祖母に直接できる事は、電話で話をしてあげる事
くらいしかない。だから他にも母が安心して祖母の
家に通えるよう、母のサポートをし、家の事を手伝
うことも、僕なりの祖母と「ともに生きる」というこ
とになるのではないかと思う。

私たちのおばあちゃんたちの世代の方々が一人
暮らしをするときにおいて、大変なことはどのよう
な事なのか調べてみた。まず、買い物について。家の
近くにスーパーなどのお店がない場合、遠くまで買い
物に行くのはとても大変な事だそう。そして、たま
に行った時には、つい無駄買いをしてしまうこともあ
るようだ。最近はそのようなことに対して、買い物
支援が行われている市町村もあるそう。神奈川県の中
でもいくつかの市町村で、実施されている。

次に、セールスについて。高齢者になり、一人暮ら
しをする人をねらった悪質商法を行う悪い人もいる。
自分の健康を不安に思っていたりすると、高額なサ
プリメントなどを買ってしまったり、オレオレ詐欺な
どを信じてしまったりと狙われることが増えてしま

うと安心して生活もできない。私のおばあちゃんは、
一つの対策として電話にでない、という事が多いよう
だ。しかし、電話にでない、私たちが用がありか
けた電話もとらないことがたまにあるので、そのよ
うな面では不便な所もあると感じる。

そして、具合が悪くなったとき。一人暮らしとな
ると、具合が悪くなってしまう場合、ご飯をつくる
ことができなかつたり、連絡もとりにづらくなつたり
してしまふ。もし、急に倒れたりしてしまつたら、
誰かが気づくまで救急車を呼ぶこともできなくなつ
てしまいます。もしかしたら、そのまま誰も気づか
ずに亡くなつてしまふ可能性もある。そう考えると、
こまめに周りの人が連絡をとつたり、ご近所さんた
ちとの関係も大切になってくるのではないかと思う。
地域の人々とコミュニケーションをとっていけるよう、
行事に参加したりすることは、自分の命を守るため
にも大切なことなのではないかと思う。

最後に、足腰が弱い高齢者は、出かけることすら
大変になってしまふ。私のおばあちゃんの場合、山の
方に暮らしているため外に出ると坂も多い。足腰が
弱いと、外に出るだけでつかれてしまふ。そのため、
外出する回数が減り、人との関わりも少なくなつて
しまふ。すると、自然と元氣もなくなつてしまふよ
うだ。私の親と一緒に出かけようとひんばんに声を
かけるが、その日の体調などにより、気分も変わつ
てしまふようである。

今回調べたのはこのような大変なことであるが、
他にも不便なことはたくさんあるようだ。調べてみ
て感じたことは、やはり人との関わりというもの
この先、生きていく上でとても大切なものだという

こと。一緒に生活をしている家族はもちろん、近所や地域の人々、学校での友達・先生、たくさんの人と話したりして関わりをもつことで、自然と元気が出てくる。そして、何かあったときにはみんなで協力して助け合うことができる。そのような関係をつくっていくれば、より生活も豊かになってくるのではないだろうか。高齢者の大変なことから、私たち中学生にとって、一生大切にしていかなければいけないことを一つ学ぶことができた。私は、少しでも多くの人がどこで暮らしても、安心して生活できる世の中ができたらいいなと思う。一人一人が思いやりをもつて行動し、町などでもみんながより生活しやすくなるような支援が増えていけば、そんな世の中に一歩近づいていくのではないか。

私のひいおばあちゃん



文命中学校3年 高橋 あかり たかはし

私のひいおばあちゃんは、私が小学6年生だった頃、亡くなりました。おばあちゃんは絵が上手でした。とてもおしゃべりでした。たくさんのおばあちゃんとの思い出は、おばあちゃんは覚えていてますか。

ひいおばあちゃんは認知症という病気を患っていました。認知症とは、加齢による物忘れとは大きく違い、体験した事の一部ではなく、全てを忘れてしまったり、物忘れの自覚はなく、日常生活に大きく支障があります。ひいおばあちゃんは、常に、私のおばあちゃんとおじいちゃんに支えられていま

た。ひいおばあちゃんは二人に何かをしてもらうたびに、
「いつも、すいませんねえ。」
と言います。それに對しおばあちゃんは
「何も悪いことをしていないのに、謝らないでくださいよ。」

と言つて、てきばきと仕事をこなしていきます。二人とも、おばあちゃんのために一生懸命で、働く姿はとても輝いて見えました。私がひいおばあちゃんに会いに行くとももちろん、私のことなんて覚えていません。
「あら、よく来たねえ。お名前は？」

と、行くたびに聞かれます。そのたびそのたびに、覚えててくれたらなあ……と思うのですが、そんなことは一度もなく、一回くらいは、大きくなったね、とか、しっかりしてきたね、と言われたかったなあ、と思っていました。一度だけ、ひいおばあちゃんの手をマッサージしてあげたことがあります。ひいおばあちゃんは気持ち良さそうにニコニコして、また、
「すいませんねえ。」

と一言言いました。私はずっとひいおばあちゃんのあの笑顔を見ていたと思います。ある日、おばあちゃんから電話がありました。その内容は、小さい頃に私が遊んでいたルルちゃんをひいおばあちゃんにあげてほしい、という電話でした。ひいおばあちゃんがルルちゃんを受け取ると、本当の自分の赤ちゃんのようにお世話をしました。最近遊ばれなくなつてしまつたルルちゃんも、とても嬉しそうでした。認知症であっても、元気に楽しそうにするひいおばあちゃんは、とても幸せそうでした。しかし、そんな

な毎日は続くわけではありませんでした。小学校最後の夏、私の母がおばあちゃんの家に来るようにという連絡がありました。母は家に着くとひいおばあちゃんは具合が悪そうにしていました。しばらく見守っていると、呼吸がだんだん深くなり、最後に何か安心したようにすうーと息をしておえると、ひいおばあちゃんは、深い眠りに落ちました。

「本当に死んでしまったの？」
おばあちゃんや母に何度も聞きましたが、いいえと首を振る人は一人もいませんでした。棺桶に入ったひいおばあちゃんは、肌がたるんで笑っているように見えたのですが、その笑顔は幸せだったと言っているように見えました。

それから何日かたって、おばあちゃん家に行つて、お線香をあげました。手を合わせ、深く目をつぶると、
「すいませんねえ。」
と笑顔でおばあちゃんは言いました。誰にも聞こえないくらい小さな声で。

誰もが一人の人間



文命中学校3年 府川 凛 ふかわ

私は、隣の家に住んでいるおばあさんと面識がありません。昔の人が聞いたら驚くでしょう。昔は近所の人同士で助け合つて生きていく必要があります。た。「おすそ分け」や「回覧板」などといった共有する空間があったので、近所の人達でコミュニケーションを

とりあつていくことが可能でした。そういつた中で地震や火災などの災害が発生し、避難するとなった時も「あの家の〇〇さんがいない」と言つて地域ごとにまとまつて安全を確保していたのです。しかし、今ではあまりそのような光景も見られませんが、おじいさんやおばあさん達の間では交流があつても、私達のような若い人との結束はありません。これはあまり良くはない。一人の高齢者を支える労働者の人数が増え、高齢者の支援がますます困難となつていく中、地域間での協力は更に重要になつていくと思つています。

近い家に住んでいる高齢者の人を助けていくためには、日頃の生活でも高齢者への配慮が必要だと思つました。例えば、とある電車で優先席をもつと多くの人に席をゆづつてもらつたために「車内全席優先席」というものが行われました。私はこれを初めて見たとき、「何て素晴らしいんだらう。これでたくさんの方が席をゆづるようになって、車内が温かい気持ちであふれる。」と思つていたのですが、現実には理想とは真逆の結果でした。「ここが優先席」と絶対に指定された優先席が無くなつたため、乗客のほとんどが「誰かがゆづるだらう」という考えを持つてしまつたのです。そうして本来必要であるはずの人の席がなくなつてしまい、しかも乗客の全員が「早く誰かゆづつてくれ」と思う、何とも心苦しい空間になつてしまつたのです。しかし正直自分がその場においても席をゆづれるかと言われると、自信を持つて「はい」とはいえません。けれど、現代の人間はもっと自分と相手との一対一の関わりを持つ意識、思いやりも大切だと思つています。

もしかしたら困つている高齢者が障害を持つた方かもしれません。そういう人を「ふつう」ではないと思つて接するのはあまりよくないです。日本より遥かにバリアフリーが普及しているドイツでは、車いすを使用する人が非常に多い。しかし、ドイツの人々は車いすを使つている人を「介護がともなう人」とは思わず、誰にも平等にして生活しています。人の助けが必要とか以前に、人として対等に接しているのでしょう。これはどの人にも共通して大切だと思つます。「助けられる存在」だからではなく、「助けを必要としていた一人の人間」だからなのです。

はじめに言つたように一人の高齢者に対する支える人数は減つていますが、「人と人として助け合う」と思つことが重要だと思つます。地域の中でも、電車の中でも、「助けられるべき人」というフィルターを介さずに、その時助けが必要な人と思つてくれます。そうすればきっと、思いやり次第で、優しい気持ちで関わる事ができるでしょう。



(2) 敬老会朗読作文の選出については、要項を別に定める。

9. 表 彰

表彰式を開催し、入選者には、それぞれ賞状と記念品を贈る。

(1) 表彰の種類

①優秀賞（小・中学生の部各3編 計6編）

○開成町社会福祉協議会長賞

○共同募金会開成町支会長賞

○開成町教育長賞

②優良賞（小・中学生の部各2編 計4編）

③佳作賞（小・中学生の部各5編 計10編）

(2) 参加賞

上記3賞に入選した児童・生徒も含め、全応募者に対し参加賞を送る。

（神奈川県福祉作文コンクール主催者より）

(3) 表彰式

①期 日：平成29年10月29日（日） ＊開成町福祉大会に於いて

②会 場：開成町福祉会館多目的ホール

10. 審査結果

(1) 入選者に対し、開成町立小・中学校在籍者には、学校長などを通じて報告する。

(2) 開成町立小・中学校の在籍者以外の方には、社会福祉協議会から直接報告する。

11. 発 表

(1) 入選者は、平成29年11月発行「社協だよりかいせい」に掲載する。

(2) 入選作文を第30回開成町福祉作文コンクール入賞作文集入選作品集に収録し、関係機関へ配布する。

12. そ の 他

(1) 入選作文の中から、応募編数に応じて上位入賞作文を第40回神奈川県福祉作文コンクールに応募する。

(2) 敬老会にて小学生1編、中学生1編、社会福祉大会にて小学生、中学生の部より各1編（敬老会朗読作文を除く最上位入賞者）朗読いただく。

(3) 応募作品は返却しないこととし、作文の使用に関する権利は主催者に属する。

(4) 応募作品により収集した個人情報、本事業に関する以外に使用しない。

(5) 広報紙等の紙面に作品が紹介される場合があるため、個人情報保護の観点からご本人やご家族・関係者等へ十分配慮する（必要に応じて事前承諾を得る）。

13. 問い合わせ

社会福祉法人開成町社会福祉協議会

〒258-0021 開成町吉田島 1043-1（町福祉会館内）

TEL 82-5222 / FAX 82-5928

第 30 回 開成町福祉作文コンクール 審査員名簿

※順不同 敬称略

所属機関・役職名	審査員名
開成町立開成小学校 教諭	細 川 澄 子
開成町立開成南小学校 教諭	大河内 泉
開成町立文命中学校 教諭	岡 田 知 也
開成町教育委員会 専門員	森 芳 久
開成町民生委員児童委員協議会 会長	鳥 海 成 則
ボランティアグループ 四つ葉 代表	落 合 ふたば
ゆめクラブ開成 会長	矢 後 正 二
開成町身体障がい者福祉協会 会長	遠 藤 伸 一
開成町心身障害児者と家族の会かるかも	関 田 仁 美
母子寡婦福祉会 つくしの会 会長	三 浦 圭 子
開成町 福祉課長	小 宮 好 徳
開成町社会福祉協議会 常務理事	加 藤 一 男

9月26日（火）の審査会にて、代表作文を審査いただきました。

■発行日／ 平成 29 年 10 月

■発 行／ 社会福祉法人開成町社会福祉協議会

神奈川県足柄上郡開成町吉田島 1043-1（開成町福祉会館内）

TEL 0465（82）5222 FAX 0465（82）5928

URL : <http://www.kaiseishakyo.jp>

Email : network@kaiseishakyo.jp

